
独りぼっちのふたり

生保内沙翁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

独りぼっちなふたり

【Nコード】

N8045T

【作者名】

生保内沙翁

【あらすじ】

子育てに疲れた彼女は、理不尽な苛立ちと、残虐な気持ちを抱いていた。自分が壊れ始めているのがわかる。張り詰めた神経の糸が、わずかなことで切れそうだと感じる。

彼女は一人、気晴らしになればと、アパートを出るのだが……。

気が狂いそう。

それに、殺してしまいそう。

将来があつて、まだ若いと思える年齢で、悩みだつてある。

夜鳴き、非難の目、命令口調には耐えられない。ベビーシッターを雇おうと、本気で考えて伝えた。家計を考へるよ、と夫は決定事項のように言った。

八月の夜が明け、部屋で話の通じないペットと同じ赤子と二人きり。

「あんだ、この部屋が気に入らないんでしょ」彼女はベビーベッドであどけない寝顔を見せている赤子に話しかけた。「私だつて気に入らないのよ。でも、贅沢はいえないの。三階の角部屋で満足してね。そういう環境に生まれたんだから……私を怒らせないで」

静かなアパートの寝室で、春風のような寝息を立てて二人は眠る。それは長く続かない。蒸し暑い部屋、壊れたエアコン、風通りの悪い開いた窓。彼女は目を覚まし、赤子が眠っていることを確かめて、中古で買った扇風機を見つめる。羽が取れそう、と思った。魔法の宅急便に出てくる自転車についた羽のように。彼女は含み笑いを洩らし、真顔に戻つて何が可笑しかったのか思い出そうとした。

長い髪のかかったうなじの汗は、深い肌触りを残して首筋を這う。彼女は髪をまとめ、いつそのことシャワーを浴びようか、と考へた。起きないようにと祈りながら、猫のように足音を忍ばせて、廊下から浴室に向かう。神経を張り巡らせた静寂。空気を伝わって赤子がぐずるのを感じ取り、急ぎ足で寝室まで戻ると、泣き声を上げないでと心で念じながら赤子をあやした。胸に優しく手を載せ、できるだけ優しい声で歌いながら、胸に載せた手でリズムを刻む。

彼女は本格的に泣き始めるのを恐れていた。五ヶ月間に試して成功した方法は、抱き上げるしかない。彼女は暑苦しい部屋で、ボイラーのような熱を放つ物体を抱えたくはなかった。

赤子は本格的に泣き始めた。急激な怒りが身体を駆け巡る。「うるさい！」

赤子を殴りつける。腹減りで泣き、人を叩き起こすために泣き、オムツが汚れて泣く。泣くからクソをとり、尻を拭き、オムツを替え、小便をかけられる。腹立ちだ。本当は女の子が欲しかったんだ。軽く叩くだけだ。叩けば泣く。彼女は抱き上げてあやす。黙ってほしい。間抜けなんだ、言ってもわからないから。赤子の寝顔を見つめると、自分の思考に嫌悪感を覚える。心が引き裂かれ、身悶えするような感覚が内側に巣くう。ジキル博士とハイド氏が、かくれんぼをしている。

夫は出張だと言って出かけた。明日の晩には帰ると言った。昼食を作り、起きた赤子におっぱいをやり、彼女が笑えば赤子も浮かべる笑みを見つめ、その笑い声と表情に罪悪感を感じる。夜がやってきた。彼女は窓を開け、赤子がベビーベッドの中で眠っているのを確かめると、夕食を買いに行くんだと自分を納得させ、トートバッグを肩にかけて外に出た。彼女にはわからない理由で、赤子が泣き始めた。取って返そうか。いや、いずれ泣き疲れて眠るだろう。外に出てドアに鍵をかけ、夫が戻ってくることを考えてスピーカーをドアについた郵便受けに挟んでおいた。私にだって気晴らしが必要だ、と彼女は思った。言葉がなくても意思疎通が図れると人は言う。親子ならなおさらだ、と人は言う。そんなの嘘っぱち。私にはわからない。それが彼女を不安にした。神経の張り詰めた部屋はうんざり。しばらく距離をおきたい。女の子が欲しかった。

彼女はコンビニで雑誌を読み、簡単な夕食を買った。片手に買い物袋を提げて、アパートに帰る足取りは重かった。あの毎日が繰り返される。退屈と寝不足と罪悪感の日々。子供なんて要らないな、と彼女は思った。死んでればいいのに。ふとした言葉が、意味を持

った。彼女は慌てて否定した。しかし、それは軽いノックのようなものだった。あの子は……可愛い？

アパートの前は明るかった。人だかりができていた。二階から出火だと誰かが言った。二〇四号室。角部屋。炎が隣に、下に、上に移ろうとしている。彼女は呆然と立ち尽くし、これは事故だ、と思つた。あの子と永遠に離れることが……脳裏に浮かんだのは、赤子の天使の笑みでもあどけない寝顔でもなく、ベビーベッドの中で母親を求めて泣き叫ぶ姿だった。彼女の内側でなにかが弾けた。彼女はトートバッグと買い物袋を落とし、野次馬を押しつけてアパートの階段を上った。泣き声が聞こえる。苛立ち、もつとも恐れていたものが、彼女の耳には助けを求める息子の叫びにしか聞こえなかった。待つてて、いまママが行くからね。

熱気は夏の蒸し暑い空気を膨張させ、赤と橙の炎は通路の手すりを舐めるように這っている。化学繊維が焼けて発生する煙が、雲の中のように視界を覆っている。彼女は階段を上る途中で煙を吸い込んだ。咳き込み、微かなめまいを覚えて段を踏み外した。彼女は前のめりに倒れた。伸ばした両手が段の端だったので、顔を打たないで済んだ。耳には赤子の泣き声が響いていた。彼女は煙で沁みる目に涙を浮かべながら、這うように階段を上っていった。煙は壁を伝い、屋根の底を迂回して空に向かっていく。

煙は高いところへ登る。彼女はそれを思い出し、踊り場から三〇四号室までの通路を身を低くして走った。周りの騒音は聞こえず、ただ赤子の泣き声だけが耳に響いている。彼女はドアにたどり着き、レバーを下に回して引いた。金属と金属のぶつかる音が聞こえた。鍵だ、鍵を。彼女は煙を避けるために身体を曲げたまま、トートバッグに手をつ込んだ。空気と腰のベルトが指先に触れた。買い物袋といっしょに、バッグも落としてきたことに気づいた。あの中に鍵がある。あのバッグの中にある財布に、いつも入れていた。

赤子の泣き声が聞こえた。彼女はレバーを両手で掴み、下に回して力いっぱい引いた。泣き声が聞こえる。彼女は何度もレバーを

引き、左足の底を壁につけて力を込めた。ドアはびくともしなかった。耳に聞こえる泣き声は、弱く遠くなっていた。

「頑張るのよ！」彼女は煙を吸い込むことなど気にせず叫んだ。「大丈夫、ママが助けに行つてあげるから。絶対に助けるから、頑張るのよ！」

炎は真下まで迫っていた。靴底が熱を持ち、足の裏を焼く。彼女は足の痛みなど感じなかった。身体を回し、手のひらに水ぶくれができるのもかまわず、手すりを掴んだ。咳と眩暈で朦朧とした意識の中、鍵の入った財布を投げてくれと叫んだ。それは頭の中だけで響いた。彼女は咳き込んで手すりから崩れ落ちた。霞む意識の中で、自分もこのまま死ぬのだろうかと思つた。恐怖が意識をはつきりさせた。あの子の泣き声が聞こえない。彼女は重たい手足を動かさず、熱くなったドアのレバーを掴むと、体重をかけて引いた。水疱が破れて汁が出た。ドアは動かなかった。

「たった一枚のドアじゃない！」彼女は右足に力を込めてドアを蹴つた。「どうして開かないの」

金属音が聞こえた。ドアの下に部屋のスペアキーが落ちていた。彼女はためらわずに鍵を拾い、低い姿勢のままドアの錠を外した。レバーを回して引く。開いた。泣き声は聞こえなかった。部屋は熱気で包まれ、炎がフローリングの床を焼き、煙は空気と視界を汚している。彼女は廊下を走り、寝室のドアを開けた。窓が開いたままになっていて、多少の煙がそこから外に抜け出している。炎が壁を這い、絨緞を焼いている。彼女はベビーベッドに駆け寄り、ぐつたりした赤子を抱え上げた。靴底が解け、足の裏が焼けるのもかまわず、彼女は赤子を胸に抱き、煙に触発されていない涙を流した。助けられなかった。ごめんね、ママ、約束破っちゃった。炎が部屋を包み、酸素を食らい尽くす。

胸の中でなにか動いた。彼女は火傷の痛みの中でそれを感じた。視線を下げ、ぐつたりとした赤子を煙を透して見下ろす。この子は生きようとしてる！ 彼女は頭痛の中で考え、重たい手足を動かさず、

リビングにつながる引き戸を開けて、姿勢を低くしたまま赤子をしつかりと胸に抱き、ベランダの窓に向かった。

「大丈夫」彼女は引きずるように足を動かしながら言った。「あなたは私の息子だもん。強い男の子だもんね。大丈夫。あなたは強いんだから。ママは頑張るから、あんたも頑張りなさいよ」

彼女はサムターン錠を開け、窓を滑らせた。ベランダに出て力尽きたようにすわり込んでも、彼女は息子を元気付ける言葉を繰り返していた。霞がかつた視界で、橙色の服を着、白いヘルメットを被った姿が見えた。彼女は意識を失った。

聴覚が最初に回復し、次に脳をかき回されるような頭痛が襲った。瞼には象と同じほどの錘がついているようだった。彼女はどこにいるのかと、ぼんやり考えた。もう一度眠った。次に意識が目覚めると、瞼は軽く、頭痛は生理痛よりもましなものになっていた。目を開け、彼女の顔を覗き込んでいる夫を見上げた。夫の目は赤く、頬に涙の線が残っていた。目から涙が溢れ、同じ轍を踏むように、頬を伝った。彼女は記憶が断片的に蘇るのを感じた。強い恐怖が襲った。そのことだけが訊ねたかった。口を動かすのは、目を開けるよりも苦勞し、声は喉が枯れたように音を発しなかった。夫は唇の動きで、彼女の伝えたいことを理解した。

夫は涙を拭い、うなずき、笑顔を浮かべた。「大丈夫だ。助かったよ。あの子はおまえに似て強いんだ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8045t/>

独りぼっちのふたり

2011年9月18日03時30分発行